

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第1章「3・11」

福島第1原発は1〜5号機で全電源を喪失した。運転中だった1〜3号機では、原子炉の燃料冷却ができていない分からない状況に陥っていた。「FP（消火）系で注水できるラインを考えてくれ」。3月11日午後5時12分、所長の吉田昌郎(56)は発電班に、消火設備から原子炉に水を入れる代替注水のラインをつくれと指示した。

1、2号機中央制御室から午後6時半すぎ、運転員たちが暗闇の1号機原子炉建屋内に向かった。代替注水ラインを構成するための弁は本来、制御室から遠隔操作で開閉でき

原子炉への代替注水

9



事故当初、福島第1原発には原子炉への注水や使用済み核燃料プール冷却のため各地から消防車が集められた。右側は在日米軍横田基地の消防車＝2月、福島第1原発

「消防車で」思い付く

る。しかし今は電源がない。

弁には手動でも開けられるよう円形ハンドルが付いている。原子炉に

近いほどハンドルは大きくなり、直径70センチのものもある。これを数人がかりで回す。必要な弁を開け終えるのに2時間半近くかかった。次はどうやって水を入れるか、だ。

吉田は自衛消防隊長小川広幸(50)を呼び「消火栓を使って注水できないか」と相談した。だが消火栓

はほとんど津波でやられていた。ならば、と吉田は消防車を使った代替注水を思い付く。

「そういう発想は全然、ありませ

んでしたね」と小川は話す。消防車による注水など緊急時のマニュアルにはなかった。

消防隊は本来、火災の消火を目的に各職場から選出された30人程度の混成部隊で、小川はもともと1〜4号機設備の点検修理を担う第1保安部所属だ。

消防車のホースを建屋に設置された送水口につなげば原子炉に注水できるはずだ。だが送水口がなかなか見つからない。

「震災前に消火栓の工事をしていたので、送水口の場所が変わっていません」

送水口は津波で流されたトラックやがれきが折り重なった1号機北側の大物搬入口近くにあった。見つけたのは消火栓工事をした建築グループ所属の消防隊員だった。

「本当にひどいあさまでした。協力企業の方に重機で夜通しがれきの撤去をしてもらって、ようやく消防車が通れる道幅を確保したんです」

第1原発には3台の消防車が配備されていたが、使える状態なのは意台にあった1台だけだ。

敷地内の放射線量が上昇する中、消防車の扱いに慣れた協力企業社員とともに4、5人の隊員が最初の注水に向かった。

「外はすごい放射線量だったんです。よく勇気を振り絞って行ってもらったと思います。みんな汚染されて帰ってきました」

消防車による代替注水が始まったのは全電源喪失から約12時間後の11日午前4時だった。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 前田有貴子)